

多摩美術大学助手展 2024 に寄せて

助手展 2024 の開催、おめでとうございます。2019 年に本学に着任して以来、同年の第 2 回展から、毎回大変興味深く拝見しています。今回は出展者が 44 名にまで増え、これまでで最大規模ですね。

今回の出展者リストを見て感慨深いのは、学生時代に私の授業を受講していた方や、私が指導教員だった方が何名かいらっしゃる事です。また、私の所属する芸術学科や学内の仕事で時々やり取りする他学科の助手さん・副手さんも数名出展していらっしゃいますが、彼／彼女らとは普段、事務的な間柄です。それがこの助手展では、作家と美術館人という関係に変わり、その別の関係性のもとで彼／彼女らの作品に接するのは、私にとって新鮮で刺激的な経験です。

七割趣味・三割仕事で、日ごろから学内のさまざまな展示を観ていますが、助手展には、学生の展示とも教員の展示とも異なる独特の緊張感を、私は一鑑賞者として感じます。その緊張感は、一方では、助手展 2023 の寄稿文で内藤廣学長が書いていらっしゃった、「助手のみなさんがその本当の姿を学生の前に晒すという勇氣ある取り組み」ということと関係しています。そしてもう一方では、助手展 2020（「TAMABI Trial Exhibition ANYHOW,」展）の寄稿文で小泉俊己学部長が出展者に対して願っていらっしゃった「われわれ教員の鼻柱を折るような」仕事を、実際に見せてやろうとする、出展者の方々の気概に起因するものだと思います。助手展を観る者にとっての一つの面白さは、そういったところにあります。そして、出展者としては、そのような助手展という特殊な展覧会の場数を踏む中で、自分の作家性を、他では得難いやり方で大いに鍛えていくこととなります。そこに、助手・副手が学内での助手展に出展することの大きな意義があるでしょう。

多摩美術大学助手展は、今回で 7 回目。この展覧会が本学の創造の現場の重要な一翼を担うほどに今後ますます発展していくことを、強く願っています。

多摩美術大学 芸術学科 教授
多摩美術大学美術館 館長
大島徹也